「在満作家」牛島春子の女性文学

鄧（トウ）　麗霞（レイカ）

はじめに

日本の国民にとって、ナショナリズムがもっとも強く意識され、みずからと国家を一心同体としてとらえていた時代は、日本国家が帝国の建設に苦心していた時期に当るであろう。国家が大量の国民を帝国建設へと動員可能なものとし、国民は帝国建設における各々の役割を演じたのである。本発表は、1936年秋に「満洲国」に渡り、1946年7月に引き揚げるまで、足掛け十年間「満洲国」に在住していた牛島春子の文学についての研究である。満洲文壇にデビューしてから、満洲・満人を素材に数多くの作品を執筆してきた牛島春子は、満洲及び日本国内でも「在満作家」として有名であった。しかし、出産のため帰国した彼女は、大東亜戦争の最中に、結果的に「日本人女性」というナショナリズムやジェンダーの枠に回収されてしまう。そのような苦痛を、今回取り扱う彼女の「女」という作品の中で検証していきたい。

一、在満作家としての牛島春子

1、「情熱を持って、満洲を描きたい」

牛島春子（1913.2.25 ～ 2002.12.26）は1936年に牛嶋晴男[①]と結婚して、夫の赴任先奉天へと渡っていく時、折しも満洲の国都建設時期に巡り合って、栄える満洲文学界で頭角を現した。もともと文学少女であった牛島は、満洲国で新鮮な素材をつかみ、「現実に存在する否定的要素に目を蔽ふてはならない」というリアリズムの創作理念を強調しながら、「私は情熱を持って、満洲を描

きたい」と述べていた[②]。

その文学理念が持ち出されたのは、彼女のデビュー作の「王属官」(『大新京日報』1937.5.22 ～ 6.4断続掲載）が満洲建国記念文芸賞を受賞した後である。「王道楽土」の満洲国政治が実施される背景に、農村における不正な徴税行為を暴く満人官吏を描いたこの作品では、満洲国農村に残されている封建軍閥時代の残滓が否定的要素として捉えられている。また、在満作家の価値を知らせることとなった芥川賞候補作である「祝といふ男」(『満洲新聞』1940.9）は、傲岸不遜な態度によって周りに排除される満人通訳祝廉天の行動を通して、祝が日本人上司に対して忠実に従う一方で、他民族との協和が困難なことも、端的に語られている作品である。主知的、男性的な骨太の筆致で描かれていて、主情的な女性作家の域を超えるものがあったので、牛島春子は男性が女性の名を騙って書いているのではないかという噂が流れたほどである[③]。そのほかに、日本人労務監督と中国人労務者の、民族を超えた信頼関係が築かれた話である「苦力」(『満洲行政』1937.10)、揉めている満人新婚夫婦の家庭問題が、日系副県長の斡旋によってうまく解決された「牝鶏」(『満洲よもやま』1940.6)、県長の第二の妻に理解と同情を寄せる「二太太の命」(『大陸の相貌』1941.4)、日本人の副県長夫人が中国人ボーイに善意の交情を求める「張鳳山」(『文学界』1941.4）などの、いわゆる「満人もの」を牛島は多く執筆してきた。無論、満洲を描く作品には、夫の職歴に便宜を得た素材が多いから、夫やその周りの人物をモデルとするキャラクターがほとんどである。

満洲の様々な実像を見る取材条件に恵まれていた上に、牛島は独自の繊細さと冷静な洞察力を生かして、社会の下層、或いは民族の境界上を生きている人間達から、満洲国の深刻な階級問題や民族問題を見出した。それらの作品から分かるように、牛島は満洲国に住む日本人が異民族（主として中国人）といかに関わっていくかというテーマを追求してきた作家であった[④]。満洲を描くことは、牛島以外の在満日系作家の間でも、満洲独自の文学を主張する一つの大きな創作課題とされていた。一方、芥川賞の選考歴を見てみると、その時期、

外地の文学は、人気を得ているのが分かる。満洲・満人を描く作品も、エキゾチックなものとして、また植民地の文化建設の成果として、日本内地でも求められる傾向があった。 芥川賞候補であった牛島が、日本国内から在満作家として、注目されるようになるのは、想像に難くない。

2、「満洲にいる私達は、何時も何か牽制を受けます」

前述したように、牛島の書いた「満人もの」は、リアリズム的なものであり、取材は夫の官職の関係もあって、満洲における民族関係が反映されている。彼女の満洲に対する情熱が、国策に便利に利用されるのは、デビュー作の「王属官」がよい例である。原題の「豚」から無断に改名された「王属官」は、受賞後満洲国の「王道楽土」の政治を宣伝するための材料として、劇化され、漫画化された。牛島に無断で内容を書き換えた脚本を使い、「王属官」の題で、大同劇団によって、満洲・日本で公演されている⑤。それにも関わらず、建設の時期における満洲国の文学は、作家たちが文学論争や、創作をより自由にできる状況である。

しかし、1940年末から41年にかけて、そこに行政の手がだんだん入り込んできた。機能が広がった弘報機関の設立、 建国精神を基調とする「芸文指導要綱」⑥の発表などは、満洲の文学を国家政策の下で統一させ、作家は同一規範による創作、同一命令による行動が要求されている。その有無を言わさない高圧的な状況を背景に創立された「満洲文芸家協会」の会員名簿には、牛島春子の名前も載せられている⑦。 当時の文壇の概況を見てみると、新聞学芸欄の減頁、諸雑誌の廃刊乃至文芸欄の廃止、内地雑誌への地元作家の進出の減少といった状況が挙げられる。その原因は、「大東亜戦争勃発後に於ける、内地雑誌界の、満洲に対する関心の薄ら」ぎ、「更に作家にとって重要な原因は、大東亜戦争を契機として、文学者自身に内在した一種の混迷にあった」と、同時代の在満作家によって指摘されていた⑧。満洲文壇が不振にも関わらず、牛島春子はまだ筆を執り、日本の雑誌にも進出している様子から、彼女の「在満作家」として

の名は日本で確立されていることが窺える。

四十年代の満洲文学が行政指導の下に統制されていた時、国策に沿って書かれた作品の典型的な一例は、満洲国建国十周年の際、『中央公論』に発表された「福寿草」（1942.9）である。強力な匪賊集団の攻撃から県公署を守る日系警務指導官が主人公の小説であるが、「匪賊」攻撃の撃退において指導官から与えられた使命を果たした「満人」も登場する。そして、作中「日本人と満洲人とが本当に運命共同体であった」というような国策的な姿勢をうかがわせる言葉は、実に「日満一心一徳」の満洲国政府声明と一致している。戦後川村湊のインタビューで、牛島が『文学界』や『中央公論』からの注文に応じて、作品を書いて日本へ送ったと回想している。「そうして頼まれた作品というのは、ほとんどが不本意な作品なんです」と述べ、「福寿草」の「この貧しい作品を建国以来治安工作につくされた日系警察官に贈る」という題辞についても、牛島は「不本意なことを付け加えたような気がします」と語っている[⑨]。

そうした「不本意」な注文作と対照的に、同時期に発表された「女」（1942.4）について、牛島は野田宇太郎に次のような手紙（1942.9.7）を送った。

> 正直な話、催促されずに自分だけの衝動で書けたものは「女」だけでした。後は半分は苦しまぎれで、それでも真剣は真剣でした。満洲にいる私達は、何時も何か牽制を受けます。内地からの注文もそうなら、土地（満洲）の人達も正式に取り上げる時は「女」のような作はあまり問題にしてくれません。[⑩]

「自分だけの衝動」で書いたという「女」は、「時局下の女の思惟と体験を描いたもの、截然とした筆致にひたむきなものがあって訴えた」[⑪]というふうに『満州年鑑』では紹介され、牛島が持つ女性性を打ち出してみせた作品のなかで、見逃すわけにはいかない作品である。そして、戦時体制に入ると「満人もの」から、「女性もの」へと素材が移ってき、自分自身或いは女性の友人を対象に

語るようになっていく。牛島文学の全体像から見れば、その転換点は「女」という作品が書かれた頃だと考えられる。牛島における転換は、「在満作家」として受けた国策からの「牽制」を脱却する試みだったのだろうか、それとも彼女が「女性」という主体性を新たに確立する試みであったのだろうか。

二、日本人女性としての牛島春子

1、内地の日本人とのギャップ

「女」は、作者の分身と思しい満洲在住の女性和江が、出産のため九州の実家に帰り、そこで対米英戦争を迎える物語である。日本で死産に遭遇した和江は（作品の第一章)、過去の自分を追憶し（第二章)、産褥中にラジオで放送された日本軍の連勝に感激の涙を流し、調子が昂ぶっていく（第三章）という内容である。前二章は私小説風に書かれ、時局や満洲のことに着目されていないが、第三章が読みどころとして捉えられたのか、作品は行政指導下創刊された満洲の雑誌『芸文』（芸文社、一巻五号、1942年4月）に載せられ、後に川端康成らが編集した『満洲国各民族創作選集（2)』（創元社、1944年3月）に、満洲文学の優秀作として再掲載されることになった。 その「自分だけの衝動で書けた」「女」に、表現された作者の内的な感情を、テキストに踏まえて考察する。

まず第一章では、独白の口調で「夜中一時頃から陣痛がはじまった」、「五分とたたぬ内に次に痛みが来る」、「二時を打つと便意を催して来た」、「次に来る痛みまでの時間をはかる」、「水がおりてから三日目の夜中に」というふうに、入念に女性の妊娠症状を描き出している。そこでは、女性主人公の身体や感情が基調となっている。結婚三年目に長男卓を得た主人公は、「卓一人を珠玉のように育て上げることにばかり、気を奪われていた」と、長男に対する愛情が綿々と訴えられているうえ、「その度に味わった新鮮な悦びと、誇らしい気持ちも今度はなかった。」「卓より他に、自分の子と云えるものがあるのだということが信じられぬ」と、もう一人多くの子供を産むことを拒否するような感情が描かれる。出産が早くなると言われた医師に対して、和江は「色んな場合の医

師の遠回しな、含みのある言い方には承服できなかった」と言い、不信感を抱いている。出産への拒否感か、和江は周囲の女性たちと距離を取っている。

> お勝手の方ではその朝来て貰った家政婦を指図しながらごとごとお湯を沸かしたり、小豆を煮たりしていて、産まれる赤ん坊のために準備をしていた。
> （中略）
> 勝手では赤飯が出来あがっていた。母は座敷にお膳を出してくさぐさの料理を運びながら又しても泣くのであった。「こんなきつい思ひをしたことはなか。お宅のお嬢さん丈は無事に産ましてあげたいと、 朝からあたしやはまっておりましたのに」とお膳の前に座らされた母と三十年来の知り合ひであるお産婆さんは云ひ、二人の年寄りはまたしても涙をこぼすのであった。そして、一言も云わずじっと仰向けに寝たきりの和江をお若いのにしっかりしていらっしゃる。修養が積んでいなさるからだと何度も褒めた。父が来て。「きつかったろうが、しっかりせぬといかんよ」と優しく云った。手伝いに来た近所の奥さんは。「心をしっかり持っておきなさいよ。」「諦めなさるんですよ。子供は又出来る。親の体が大事ですよ。」と口々に和江をはげました。けれど和江はそれらの言葉を仰向けになった姿勢のままひごとのやうに聞き流していた。それらの言葉がむしろ白々しい響きをもって和江の上を過ぎて行くやうであった。

主人公は彼女らの自分への熱心な優しさを受け止めようとせず、他人事として扱っていて、まるで自分が局外の人間のようである。和江の無関心ぶりと「彼女ら」の反応との間に、違和感が生じている。それは、植民地に在住する女性と日本国内の女性とのギャップと言えるであろう。戦時期の日本の女性たちが徐々に国家権力に組み込まれ、彼女らの母性は国民国家の形成に大きな役割を果たしてきた[12]。しかし、日本内地と植民地で、異なる立場に置かれた日本人

女性に求められた母性は決して一様ではない。内地では、「産めよ、増やせよ」のスローガンで、「軍国の母」のような女性像が作られたことが、当時あちこちの雑誌では検証できる。例えば、『主婦の友』という代表的な婦人雑誌には、結婚、出産の記事に溢れ、母子像の挿絵が多く登場し、子供を育てる母としての女性像が強く打ち出されてきた。

一方、「五族協和、王道楽土」の建国理念を掲げ、戦火の被害をこうむらなかった満洲国では、各地婦人団体が結成され、 異なる任務が与えられた。とくに、指導者の位置に立つ日本人女性の「婦徳」の強化、満洲国民の半分以上を占めた婦人に対しての教育、教化の事業が重要視されていた。その点は、牛島の書いたものの中からも確認できる。例えば、「張鳳山」には、「満人当差」が「満人であり、同時に県民の一人である」こと、「満人の社会というものは日本人の想像以上に噂の早い所で」、「当差が見たもの、考えたことはそのまま満人大衆の中に伝わっていくものとかんがえなければなりません」などと、日本人の副県長の奥さんが注意された場面がある。そうして、民族的政治的な意味合いを持つ満人ボーイの心をつかむことは、満洲民族をつかむように大事なことだと、奥さんが分かるようになったのである。また、牛島がまだ新京にいた時、「『在満女性』にある問題」というエッセイを書き、『婦人公論』(1941.10)に発表した。「在満女性」が日本内地の女性に比べて欠点があると言われていることに対して、牛島は満洲の風土環境が原因だと指摘し、「在満女性」の優れている適応性を挙げた。また、異国での異民族環境が、強い国家意識、民族意識を持たせることも、彼女は意識している。「少し大げさに云ふと私の小さな日本人としてのあり方は、遥かに日本民族の興亜の聖業に迄繋がっている事を悟らされたのだ。」と語る牛島にとっての「在満女性」としての自覚は、出産を中心とした「母性」ではなく、他民族との共生し、他民族を指導する立場に立つことであった。

日本内地・満洲国で求められる女性像の相異点のほか、牛島は時局に対して鈍感な反応をしめしていた。

日本人にとっての十二月八日は、集団的に高揚していく日であるように記録

されている。加藤周一は、あの日の街が、「喜びにあふれていました」、「湧きかえっていました」と記憶し、「みんなが一緒にある方向に流れ出すと、どんどん進んでしまう。集団から逃れることができなくなってしまう。」とその集団主義と狂信主義について描いている[13]。作品中、和江の出産日は「昭和十六年十二月十九日、十九日とはあまり好きな日ではない」と記していて、出産が済むまで大東亜戦争について一言も触れられていなかった。ただ、その日の夜お産婆さんが帰っていくと、和江はラジオのスイッチを入れてくれるように頼んで、そこで、「大東亜戦争が始まって、もう十日たっている」と淡々と言及される。和江が高揚していくのは、「十二月二十五日、産褥一週間の床の中」で、「香港陥落のニュースを聞いた」時であって、そこで、「十二月八日のあの感激」を改めて認識する。

> 十二月八日のあの感激は和江にとっても恐らく終生忘れる事の出来ぬものであらう。その朝、父母と和江は卓を交へて光風霽月ともいふべき清清しい晴れやかな食卓を囲んだ。「ああ、明るくなった。」と和江は子供のやうに思はず声をあげ父母を微笑ませた。

祖国日本と離れた牛島の高揚に見られる時間差は、彼女のもう一篇のエッセイ「大いなる現在」（1942. 12）の中で、その理由を見つけることができる。

> 昭和十六年十二月八日、あの生涯忘れることの出来ぬ、銘記すべき日を私は九州の片田舎の郷里で迎えた。（中略）恥ずかしい話ながら、十二月七日まで私は風雲急を告げている日米会談に対して、左程の重大な関心を寄せていなかったと云へる。<u>一つは満洲に住むの故のづぼらと鈍感さもあったろう。</u>帰郷して世の中に新聞があるからには世界見物の必要なしといふ父親の食事時の話相手に、日々に報道される日米会談や、それに関する植民地あたりの情勢について色々と憶測を語り合っていた位で（後略）[14]

作中の主人公和江は、内地日本人と同じ時点で高揚するのではなく、死産を経た後、事後的に「十二月八日」に高揚していく。その時間的なずれは、外地から帰国した彼女と内地日本人の間に出てきたギャップといえるであろう。

2、死産がもたらした喪失感

赤ん坊が墓地に運ばれた後の人気のない部屋で、和江は静かに涙を流した。「翌日もその翌日も、和江は家人のいない時に蒲団にあごをうづめて涙を流しつづけた」。「産む女性」としての自覚がなかった和江は、自分が彼女らを拒否するどころではなく、彼女ら――「日本人女性の規範」から外れた立場に立たせたことに気づくようになったか、人々の言った「諦めなければいかぬ」「しっかりせねばならぬ」という「陳腐な慰めの言葉」に助けてもらうようになっている。

彼女にとっての死産の意味は、赤ん坊を亡くしたことに止まらない。死産された女の子への思慕は、かつて亡くした俊介叔父を想起させ、同時に和江の昔の夢が呼び戻されることとなる。俊介叔父は支那事変が起ると応召され、二ヶ月の後にはあっけなく亡くなってしまう。その報せを受けた時、和江は結婚して満洲にいたが、夜中「俊介叔父の骸の前に坐って声をあげて泣いている夢をみて目が覚めると、夢の中で流した涙が和江の頬と枕をびっしょり濡らしているのであった」。四年前に戦死した俊介叔父と今回死産になった赤ん坊、その独立しているように見られる二人は、「みち」という女の子の名前で、親しくようになった。「みち」は、叔父の俊介が「みっちゃん」と呼んでいた和江のもう一つの名前から取った名前である。特別扱いされてきた和江は五、六歳ごろ、男の子のように独楽回しや竹馬に乗ることを教わったりしてもらい、女学校に入っても色のあざぐろい、肉付けの薄い少年のような娘であった。このように男女の性差を強調しないで育てられてきた和江は、俊介叔父の理想と信念に深く影響を与えられたから、赤ん坊に「みち」と名付けようとする行為は、俊介

叔父及び彼の信念にまだ未練が残っているのであろう。「みち」という名前は、実は理想をもって生きていく、自由な「道」という意味を暗示しているではないか。

> 「おっ、なんだい。みっちゃん」ととぼけた顔でにやりとした。そしてまた元の姿勢にねころびながら、「ミチカと云ってね。かっちゃんみたいな子が活動に出たんだよ。」と他所事のやうにそっぱを向いて云った。（中略）俊介叔父はどうしろと指図することも、何んな本を読めと教えることもあまりしなかった。にもかかわらず、和江が大人しく家庭に入ることをしないで、すすんで職場を求め信念に身を挺する生き方を学んだのは俊介叔父の言外の暗示であったと思ふのであった。云ってみれば俊介叔父の中に隠れていた鉄分を、和江の持つ磁針が鋭く感じ取り、それによって和江は方向を定めたのだと云へた。

先ほど満洲文壇の状況を紹介する時にも触れたが、四十年代の満洲文学は政治に統制され、検閲がきびしかった。「職場を求め信念に身を挺する生き方」について、作者がそれ以上詳しく展開できないが、そこに作者の自己投影が潜んでいる。女学校を出た牛島は、発禁の書物を読み、労働運動、共産主義運動に飛び込んでいた。1932年全国一斉検挙で警察に逮捕され、二ケ月の留置場生活を送って、病気を患ったにも関わらず、また運動に戻って、再逮捕された。自分の理想の道に向かって進んでいこうとした牛島は、日本に住む所はないと感じ、「外国逃亡」の心情で満洲国へ渡った。

作中の主人公が出産のため戦時下の日本に帰国した時、産む女性をめぐる状況は、国家と社会から一種の肯定、義務感が与えられたものであった。その逆に、死産によって「日本人女性」としての要請・期待に応えられなかった和江は、「女性」ないし「国民」の規範から外れた存在となる。さらに、「みち」という名前の子供の死産は、彼女の日本人女性とする挫折感を喚起させ、親に対

する罪悪感も抱かせるようになる。主人公は、赤ん坊が駄目であったことを知り、「生々しい悲しみも嘆きも湧いてこなかった」が、「母は赤ん坊をこの人と云いもはや洟を啜り上げていた」と気になっているようである。そして、目を開いて初めて母の方を見ると、仏壇の前に線香をあげている母の後姿が現れている。「母の後姿にふっと今までにない老いの影を感じ、瞬間気の毒のは母である」と「良心」の呵責に苛まれ、反省するような傾向をみせる。親に対する罪悪感が、国家への罪悪感と重なるように感じた和江は、共産主義運動に失敗した作者と類似しているところがあるように見られる。

牛島の非合法運動時代は、「アカ」（共産党）は「非国民」の最たる者とされる。坂本氏の作成した年譜によると、 牛島春子のお兄さん、1931年小学校教員であった牛島磐雄は、自由主義者として教壇を追われた原因の一つが牛島を匿ったことが露見したからことである。春子が満洲に渡った後の1938年の時、磐雄は前歴を持つ身に特別高等警察の監視が続いていたため転居したこともある。牛島一家が世間から有形無形の屈辱を受けたため、牛島春子は家族から除籍という形で責任を取ろうともしたことは、彼女の拘置所体験を描く作品から分かる。「殊に両親の愛情は最も始末に困るものなのである」[15]と拘置所にいた主人公が感じていた。そうして、「女」という小説も、「大いなる現在」というエッセイも、両方ともに両親を喜ばせたような場面が出てきた。

3、付和雷同の叫び声

大東亜戦争の勃発を契機に、文学者たちは実にその体験と感想を大いに文学の題材としている[16]。それらの文学の多くは、戦争肯定や日本への一体感に浸った発言で、軍や政府のプロパガンダを担ったと思われるが、英米との開戦は、文学作品よりもマスメディアによって、いち早く伝えられ、国民を高揚させていく。また、文学者たちは同じような調子で、メディアの発言に付和し、ナショナリズムの言説を生産していった。

一九四一年十二月八日午前七時のラジオ時報の後、突如「暫くお待ちくださ

い」「臨時ニュースを申し上げます」とアナウンスが入る[17]。その大本営発表のニュースの割り込みの仕方からは、マスメディアの敏速な対応が窺える。産褥期の主人公にとって、外界を知るための媒介は、テキストに見られるように、婦人雑誌や、ラジオなのである。先行研究[18]で問題として取り上げられてきた「女」の第三章は、大東亜戦争が始まって十日間後の十二月二十五日、香港陥落のニュースを聞くことから始まる。そして、過ぎ去った十二月八日の感激も、その日のラジオで奏された軍歌を聞いてから喚起された。

> 十二月八日のあの感激は和江にとっても恐らく終生忘れる事のできぬものであろう。（中略）和江の中の琴線が、一番調子で絶え間なく鳴りつづけているようであった。それは爽快で、純粋で、恐らくこの日国民の凡てが高らかに奏しはじめた交響楽の、その一つの弦で和江のもある筈であった。特に和江が切実に己れの幸福を思ったのは、帰郷中にこの日本民族にとって忘れることの出来ぬ大きな日にめぐり遭ったといふことであった。

死産の衝撃を受けた和江は、「子供を失った自分丈の悲しみ」と「日本が今経つある厳粛な時代に産まれ合わせた感激」とが溶解し、「満洲国の国民から日本の国民に還元している」と、祖国日本への帰属感を強調した。そのような調子で発言できたのは、死産の経験のほかに、マスメディアも公的な呼びかけの装置として働いているからである。「女」の第三章では、「十二月二十五日」、「十二月八日」以外に、「或日の朝のニュース」がきわめて詳しく記録されている。そのニュースでは、同盟特派員の手記による敵前上陸の有様が放送された。

> 日本兵は手に手に銃を持って海の中に飛び込んだ。波は大きく揺れ、敵の砲弾はひっきりなしに周囲に炸裂する。（中略）それを切り取る挟みがチラチラと薄明の中に見える。別の所では肉弾をもって進路が開かれる。そして又土鼠の前進をつづける。長い長い時間の後、鉄条網の向ふに突然

ぱっと立上がった黒い影がみえた。その影につづいてあちらからもこちらからも一斉に黒い影はたちあがり、銃をかざして突貫を開始した。

主人公の聞いたこのニュースは、まさに十二月八日日本軍がマレー上陸作戦を敢行する場面であろう。 一九四一年十二月八日、月曜日の午前二時十五分の時、英領マレー半島コタバル海岸への日本軍の奇襲上陸によって、大東亜戦争は開始された。月明かりの中で、日本軍がずぶ濡れになって懸命に海岸めがけて泳いでいる姿や、被弾した輸送船からふきあげる黒煙が、海岸の砂浜に伏したまま前進をはばまれている上陸部隊を包んだ戦場の一シーン[19]は、特派員に記録され、ラジオで日本の国民に伝えられた。また、作者は如実にそのラジオニュースを作品に描いたのである。それによって、主人公は繰り返して「兵隊さん有難う」と気持ちを昂ぶらせ、戦時下女性の「子供を産む」という役割分担を自らの使命として受けいれていく。

体が痛んだ。涙は止めどもなかった。これより美しい生き方があるとは思えなかった。日本民族は戦うのこそもっとも相応しい民族なのだ。（中略）
和江は今更のやうに男の持つ使命の偉大さに打たれ、目を開かれる思ひであった。 それなら女は？と和江は自らに反問した。 それは子供を生むことだ！と和江は叫びかへした。和江の肉体は、 精神はそう叫ばずにはをれなかった。男の戦場に闘うことと、女は子供を産むことは民族を育てる表裏一体の営みにすぎぬのだ。（中略）幾人も幾人も産んで立派に育てあげるのだ。それは水を求めるように生理的なものですらあった。

「女」は、戦争被害を受けた歴史を持つ中国においては、戦時下のプロパガンダ的な文学として、「戦争の泥沼に陥った日本政府によって、女性の戦争協力が動員されていたので、牛島春子は深く軍国主義の影響を受けていたことが見られる。」と批判にさらされている[20]。それと反対に、田中益三は「牛島は自

らの女性性の部分に重ねて自らを語るとき、強気になって打って出るという方法を取った。これを戦時体制に同調した作家のお辞儀とばかり解することはできない。そこに牛島春子の苦しい女性性の発露を見る」[21]と同情の意を寄せている。さらに、田中氏はその「苦しい女性性」を、男性原理と対立する女権回復の叫びだと解釈している。しかし、形から見るとそれはただの同調である。

戦時下「女性」、「母」が固有名詞ではなく、社会的カテゴリーとして呼びかけられ、母性が高く位置づけられた世論は、国家や政府から出された広報にも窺える。

> 国の宝、つぎの日本を背負って立っている人々をお腹の中で育てている妊婦、乳児をその腕の中で哺み育てている産婦は、女性として最も尊い国家的仕事に従事しているのです。即ち年々幾百万人の女性が母性として御国のために御奉公しているのです。そして妊娠や出産のため年に約五千人の母親が死亡しますが、この犠牲は戦場における男子の戦死にも比すべきものであります[22]。

日本における「産む女、戦う兵士」の主流言説へ、主人公はどんどん寄り添っていく。 その付和雷同だけで、主人公が「産む女」というジェンダー、母性をもって、「日本人国民」というアイデンティティーを取り決めようとした。最後に、和江は「産褥の床の中で足を延ばし、自分の体をさすりながら、己のすこやかな生命を愛しむのであった。」と、日本人女性として新生するようになった結果のである。

おわりに

差異を以って集団から排除された他者が、集団との類似を共有することは、ナショナリズムを主張する一番安易な方法であろう。嘗て日本で共産主義運動に失敗して満洲国への逃亡をし、自由に満洲を書きたかったが強制を受けたと

いう現実は、作者をどんどんその理想から遠ざけていく。また日本に帰国して死産に遭遇したという挫折の連続は、作者を日本が求めている女性・大きく言うなら国民からはずれた立場に置いた。が、戦時期におけるジェンダーの役割の再配置と、大東亜戦争を契機とするナショナリズムの昂揚は、日本で喪失した「国民の資格」を取り戻す一番便利なシステムである。俊介叔父に戦死され、「みち」も死産となったことによって受けた心の痛みはまだ遠のいていないにもかかわらず、「男が戦場に闘うこと、女が子供を産むこと」という叫び声で癒しを求めるのである。こういう生き方を取ったことは、かつての「信念に身を挺する」という理想をもって生きてきた作者にとっては、自己否定に繋がるものである。

［注］

①牛嶋晴男（1909.3.16－1972.11.12）、1934年九州帝国大学法文学部を卒業、在学中牛島春子の仲介により、錦州で中国人労務者の労務監督をする。1935年「満洲国」官吏の育成を目標とする大同学院に入学、10月第四期生として卒業。1936年、牛島春子と結婚して、牛島を伴い「満洲国」に正式赴任する。「満洲国」では、奉天省属官、龍江省拝泉の第四代目の副県長、総務庁企画処参事官、満洲国協和会中央本部参事官などの官職を経て、1944年3月召集を受けて入隊。（坂本正博によって作成された年譜を参考している）

②牛島春子「農村を描け――『王属官』を中心に」、『赭土』新京文芸集団、1938年3月

③牛島春子の野田宇太郎あての手紙（昭和十七年四月十二日）に書いてある。多田茂治『満洲・重い鎖――牛島春子の昭和史』弦書房、2009.7　117頁

④西原和海「『芸文』第四巻解説」、『芸文（芸文社版）1巻5号』ゆまに書房（復刻版）、2007年7月

⑤坂本正博「拝泉へのまなざし　旧満洲での牛島春子の作品（上）」（『叙説』2001年1月）によると、選考委員の赤川孝一が主人公である王属官から改題名を取っている。『王属官』の脚本化と演出を担当したのは藤川研一であった。

⑥「芸文指導要綱」は1941年3月23日に発表された。中には「我国芸文ハ建国精神を基調トス、従テ八紘一宇ノ大精神ノ美的顕現トス」、「東亜新秩序ノ建設ニ貢献シ進デ世界文化ノ発展ニ寄与スルモノトス」。そして「芸文ノ総合的発展ヲ図ル為各団体ヲ構成分子トシ満洲芸文聯盟（仮称）ヲ結成ス」。「政府ハ各団体ヲ直接指導ス」などの内容が出てくる。

⑦『満洲文芸家協会の栞』満洲文芸家協会編、1941.8から、「趣旨」、「設立経過及設立会議」、「会員名簿」が確認できる。当時、中国、台湾、満洲各地では、連動する組織が次々とつくられ、イベントも行なわれていった状態である。

⑧富田寿「満洲文学概観」、『芸文』第一巻第十三号、芸文社、1942年12月　110頁

⑨川村湊「満洲文学から戦後文学へ――牛島春子氏インタビュー（聞き手・川村湊）」、『「戦後」という制度――戦後社会の「起源」を求めて』インパクト出版会、2002.3　112頁、122頁

⑩多田茂治『満洲・重い鎖 牛島春子の昭和史』弦書房、2009.7　119頁

⑪『満州年鑑9』満州文化協会1943年の復刻版、日本古書センター、2000年1月　321頁

⑫相関する研究は女性史の分野で多く行なわれてきたが、例えば東京歴史科学研究会婦人運動史部会編集『女と戦争　戦争は女の生活をどう変えたか』1992年12月、若桑みどり編『戦争がつくる女性像』筑摩書房1995年9月、早川紀代編『植民地と戦争責任』吉川弘文館2005年2月、などが挙げられる。

⑬加藤周一『ある晴れた日の出来事』かもがわ出版　1989年2月

⑭1942年12月の『観光東亜』第九巻第十二号に、「十二月八日を想起して」という欄に組まれているエッセイの一篇。

⑮牛島春子「秋深む窓」、『女人藝術』鎌倉文庫、1949年1月　12頁

⑯内容は別とするが、例えば村光太郎の詩「十二月八日」(「婦人朝日」42年2月)、太宰治「十二月八日」(『婦人公論』42年2月)、坂口安吾「真珠」(「文芸」42年6月）がある。また、伊藤整、武者小路実篤、火野葦平などの有名作家を含む、多くの同時代作家が言及している。

⑰桜本富雄『戦争はラジオにのって』マルジュ社、1985年12月8日　24頁

⑱先行研究として挙げられるのは、田中益三『長く黄色い道――満洲・女性・戦後』せらび書房2006.6、Kimberly Kono“From the Nikutai to the Kokutai：Nationalizing the Maternal Body in Ushijima Haruko’s‘Woman’”, U.S.-Japan Women’s Journal No.45, 2013 Page70、また、西原和海「『芸文』第四巻解説」、『芸文（芸文社版）1巻5号』ゆまに書房（復刻版)、2007年7月多田茂治『満洲・重い鎖――牛島春子の昭和史』弦書房2009.7122頁、劉春英「牛島春子と『満洲』」、『外国問題研究』2009年第1期でも、言及されている。

⑲前掲、桜本富雄『戦争はラジオにのって』マルジュ社、1985年12月8日　19頁

⑳批判的に読む例は、例えば:劉春英「牛島春子と『満洲』」、『外国問題研究』2009年第1期中国語原文:《女人》是牛岛春子描述被战争阴霾熏染心灵的一篇杰作，反映了寄居异国的日本女人的风貌，小说鼓吹男性在战场上战斗，女人要为民族的发展多多生儿育女,举国上下共同生活。此前的1940年，日本政府发令,动员全日本的女性多生儿育女,为日益陷入泥坛的战争服务，足见牛岛春子受军国主义影响至深。(日本語翻訳：戦争の泥沼に陥った日本政府によって、女性の戦争協力が動員されていたので、牛島春子は深く軍国主義の影響を受けていたことが見られる。)

㉑田中益三『長く黄色い道――満洲・女性・戦後』せらび書房、2006.6　88頁

㉒「妊産婦の手帳制」、『週報』三〇二号　1942年7月　21頁

＊討論要旨

武田悠希氏は発表者が提示する、1. 大東亜戦争を契機とするナショナリズムの高揚が、国民の資格を取り戻すために一番便利なシステムであった、2.「男が戦場で戦うこと、女が子供を産むこと」と叫んだことがそれまでの作者の理想に反する自己否定につながった、という二点が作品の中では具体的にどう書かれているのか意見を求めた。発表者は、作中の主人公である和江は俊介叔父から深く影響を受け、男女の性差がないように育てられてきた人物であったが子供を産む覚悟が無かったため、大東亜戦争を契機に当時の日本で主流言説になった「男が戦場で戦うこと、女が子供を産むこと」に巻き込まれ、そう叫ぶようになった。すなわち大東亜戦争によりジェンダーが再配置され、日本人女性はそのシステムの中で自己の立場を確認するようになった。しかしそれは、作者の元々の理想に反する道と捉えられてゆくと回答した。

武田悠希氏は、作品の結末部が作者の自己否定に繋がるとはどのような意味なのか、更に発表者の見解を求めた。それに対して発表者は、作者は左翼運動に参加し、共産主義運動の理想を持つ女性作家であるが、大東亜戦争勃発以降は国家及び親に対する罪悪感が重なり、理想を実現できず苦痛を持って叫んだと回答した。